

旺文社文庫

川のある下町の話

(他) イタリアの歌

川端康成著



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやすくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

末任好夫

【編集顧問】 伊藤 整 茅 誠司 木村 毅
(五十音順) 塩田良平 中島健蔵 森戸辰男

旺文社文庫 川のある下町の話 他一編 200 円



昭和43年5月1日 初版発行
昭和44年7月10日 重版発行
著者 かわ ばた やす なり
川 端 康 成
発行者 鳥 居 正 博
印刷所 株式会社加藤文明社

旺 文 社

162 東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 267-1111 [代]

© 旺文社 1968
(許可なしに転載、複製することを禁じます)

(中村印刷・三宅印刷・穴口製本)

旺文社文庫

川のある下町の話

(他) イタリアの歌

川端康成 著

旺文社

目次

川のある下町の話

イタリアの歌

解説

一、その人と文学

——作家として世に出るまで——

二、「川のある下町の話」とそのあじわい

三、「イタリアの歌」とそのあじわい

映画化のことなど

国際人川端康成

代表作品解題

参考文献

年譜

ふるや
古谷 綱武

三九
三九
三九

きぬがさていのすけ
衣笠貞之助
松岡 洋子

三〇
三〇
三〇
三〇
三〇
三〇
三七

五

挿絵 福田豊四郎
（婦人画報 昭和二八年 一、二、三月より転載）

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

川のある下町の話

川に流れる子

あの町もこの町も、そうなったことだが……、戦前は、郊外の、静かな町だったのが、空襲で焼き払われて、終戦と同時に、闇市^{やみいち}とかマアケット⁽¹⁾とかいうものが、小さい駅の南北に、にぎやかでせせこましい通りをつくった。

そのマアケットが、ぼつぼつと二三軒ずつ、どうやら家らしい形に建て直されていって、一年ほどのうちに、道幅のせまい盛り場になった。

二つの映画館、ゲム・センターと呼ばれるあたりには、十軒以上のパチンコ屋、そして路地から路地へ、スタンドバアや居酒屋、そば屋、すし屋のような店がならんだ。

改装されて、灰白色に塗り変わった、N駅のブリッジの下に、つばめが巢をかけていた。夜ふけまで明るい灯の下を、親つばめが餌を運んでいる。

十軒にあまるパチンコ屋の流行歌と玉の音と、地ひびきをたてて通る電車と、ひっきりなしの行人の足音と……、つばめの雛^{ひな}の育つころは、その上に、盆踊りのはやし太鼓^{だいこ}と、小屋芝居^{しばい}の客呼ぶアナウンスと、つばめは睡眠不足にならないのだろうか。

夏の夜は、今どきめずらしい門^{かど}づけ⁽²⁾も、電車からおりる。四竹^{よっだけ}を鳴らして、竹細工^{たけざいく}をして見せる

(1) 当時、インフレーションの進行にともない、公定価格を無視した露店ふうの市場が各地に開かれた。ブラック建
ての長屋ふうの闇市をマアケットと称した。

(2) 門口に立って音楽などの芸をし、金をもらって歩く人。

老人、鳥追い姿の男女……。⁽¹⁾ 繻帯だらけの幼子を負い、⁽²⁾ 買ひもの籠をさげた母親は、店の前で止まると、不意に歌いだす。これは女乞食なのだ。空腹を訴えて、倒れて見せて、唯一の所持品だという西洋かみそりを買わせる少女も、そのサクラをつとめる、見かけのいい青年も、駅のつばめとは顔なじみである。

「つばめをもらんなさい。日本が戦争に敗けても、占領されても、つばめはなつかしい日本へ、南の国から子を産みに来た。外国から来る奴で、態度の変わらないのは、つばめだけじゃありませんか。」

サクラの青年がそんなことを言うと、なるほどとつばめの巢のほうを見る人もある。

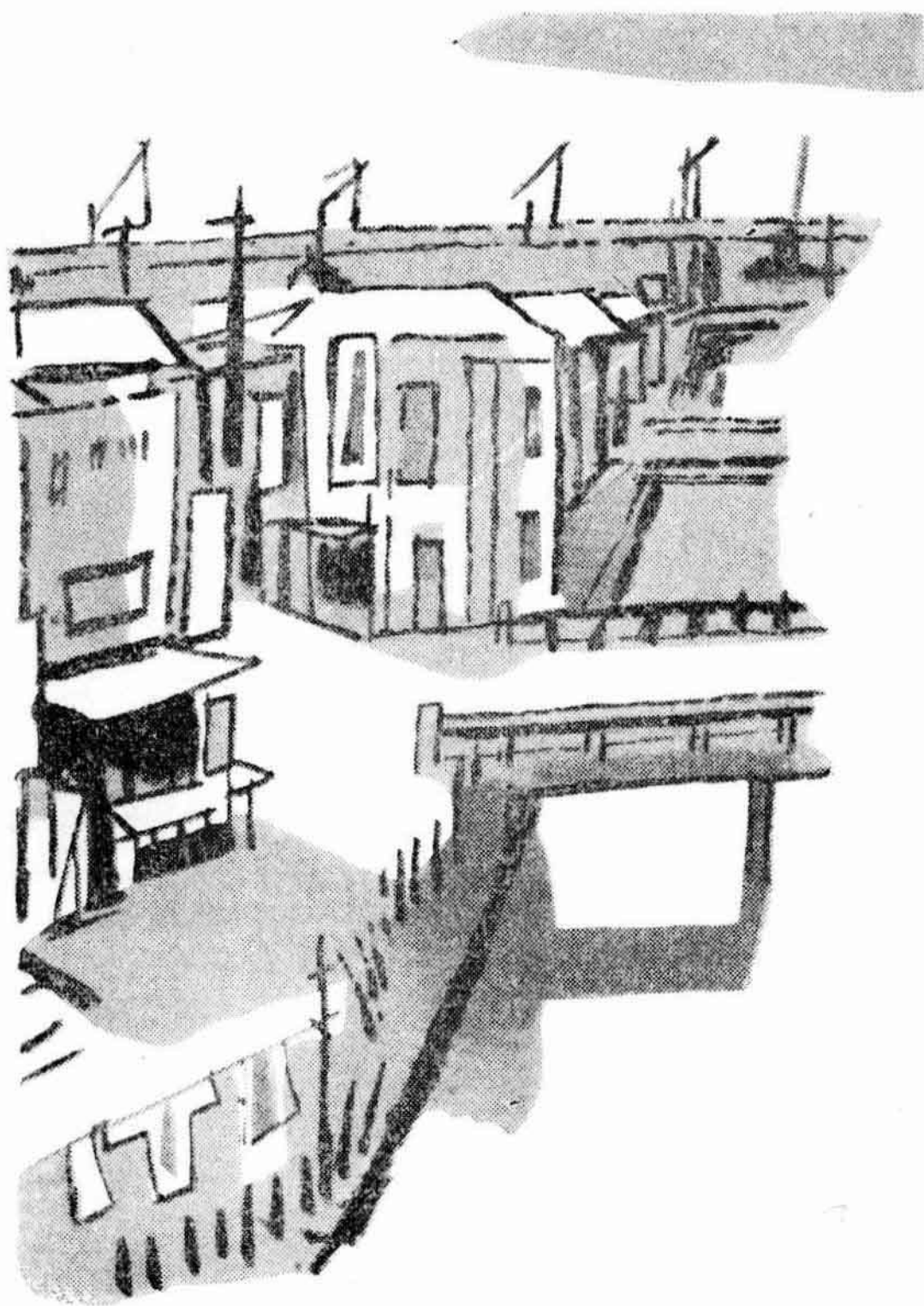
「つばめのなじみの家も焼かれたんだ。それで駅のブリッジに巢をつくった。この女の子とおなじですよ。」

青年はまことしやかに言う。

晴れた日の午後には、狭苦しい道ばたに、一稼ぎの店をひろげる。ゴムマリ、二十日ねずみ、端布、子ども服、合歡の苗……。曳き売りの車の上には、ゴム紐から、コップ、灰皿にいたるまで、一品五十円……。ミシンの月賦販売、握りずしの器械まである。子どもの虫切りには孫太郎虫。⁽³⁾

「奥さん、子ども衆がおありでしょう。めずらしいわねえ、この孫太郎虫……。戦後はもうなくなつたのかと思って、私さがしていたんですよ。ここで見つけて、うれしくなっちゃいました。やは

(1) 竹片を両手に二個ずつ持って鳴らす、子ども相手の竹細工であろう。(2) 門づけの一種。和服で編み笠をかぶり、三味線を持つ。(3) ヘビトンボの幼虫。川などにすみ、黒焼きは子どもの疳の薬として知られている。



り日本はほろびないわ。」

と、店の前にしゃがんで、通行人に話しかける、これもサクラらしい女は、お白粉しろいやけの首すじを、髪はアップにして、ブラウスにスカートで、赤い鼻緒はなおの下駄げたをはいている。通りがかりの一人ひとりの男は、

「孫太郎虫で、日本はほろびないか。」

こんな風景は、平和な昔、浅草にもよく見られた。浅草では、土地になじんでいたものだが、今はあの町にもこの町にも、毒きのこが生え出したようだ。

この町は低い土地にあって、川にかこまれていた。

川岸には、温泉じるしの旅館がならんでいるところと、うらがなしい家並やなみと、そうして大きな工場やS医科大学の所属病院も立っていた。

川は暗くつづいている。

ふだんは、毒けのありそうな水がよどみ、川底の鉄屑を拾う男たちの腰下くらいの深さでしかなかった。

……八月の二十日すぎ、二三日はだすずしい日がつづいた後に、うだるように暑い日があった。新聞もラジオも、アメリカの女の名のついた台風(1)の、予報をつたえていた。

九州はもう荒れもよう、関東は余波を受けるくらいのもものらしかったが、寝苦しくむし暑い東京の夜は、大雨になって明けた。

(1) 戦後、占領中のアメリカ軍は、北半球に発生した台風(1)に女性の名をつけた。(カスリン、ジェーン、キティ等)

朝の八時ころまで、話し声を消すほどの雨がつついて、町をめぐる小さい川は、水かさを増し、谷川のような音をたてた。

雨があがつて日がさすと、なま温かくしめった風が、西南から吹いたり、東南に変わったりで、人間も落ちつけなかった。青空をのぞかせながら、いろいろな形の雲があわただしく走っていて、暗くかげったと思うと、たちまちすさまじい雨になるのだった。

降ったりやんだり、午後にもつづいた。

川ぞいの病院も、いつもなら外来の患者で混雑する小児科の受付が、この悪天候のために、閑散かんさんだった。

この春、S大学を卒業した栗田義三は、国家試験を受けるあいだ、この病院の小児科にインターンとして、通勤をしているのだが、外来のカルテを取ることはない午後は、受け持たされている入院患者の回診までに、手持ちぶさたな時間があつた。

しぶきをあげて降る雨を、義三は医務室の窓からながめていた。川の水があふれて、もう一二寸で、道へ上がりそうであつた。

川岸の桜並み木を、戦争中に、たきものに困った人びとが、根こそぎにしてしまったのと、川の両側の家いえで、いろんなものを捨てるとで、川底が浅くなって、ちょっとした雨でも、すぐ水があがるのだった。

この川岸に、桜が咲きつらなっていたことなど、遠い世の夢のようで、義三には信じられなかった。いつも暗くよごれている川が、雨の勢いで狂いたって、歯をむき出して、橋げたに噛みついてい

るのが、鬱憤^{うつぶん}晴らしのようで、義三には小気味よかった。

「やれ、やれ。」

と、子どものけんかをしかける時のようだった。

義三の見ている間に、道路にあふれ、岸の家の戸口の下まで、川幅をひろげてしまった。しかし、大ごとにおよぶような川ではない。

雨が小やみになると、水はまたすみやかにひいていた。

路地、路地から、おとなや子どもが出てきて、川をものめずらしそうにながめた。

義三も人びとのけはいに誘われて、出てみたくなった。予防着を壁のハンガアにかけると、受付の石だたみの隅^{すみ}にある、木のサンダルをつっかけて、川のふちへおりた。

見るまに縮まるように流れてゆく水を追っかけて、子どもの群れが走っていた。

義三がたばこに火をつけた時、

「ああっ、子どもが落ちたっ。だれか助けてあげてえ……。」

と言う叫びで、川を見ると、白いシャツの小さい背なか、流れに浮かんで、たちまち橋の下に、まきこまれていった。

義三は川に沿ってかけ出した。かけながら、ワイシャツを脱ぎ、流されてゆく子どもの位置をたしかめて、飛びこもうと考えていた。

しかし義三は走ってみて、流れの早さにおどろいた。

白いシャツの子どもの姿は、浮きつ沈みつ、第二の橋の下にくぐってしまった。

義三はなお走って、川に飛びこむと、流れてくる子を抱きとって、岸にあがった。

医者のお卵だったから、義三は子どもを静かに寝かせ、人工呼吸をほどこし、あしをもちあげ、頭を下げて、ぶくんとふくれた腹を押して、水も吐かせた。

まだほんの幼い男の子であった。

「三、四歳かな？」

と、義三はつぶやいた。

落ちた時か、橋の杭にでもあたったのか、子どものこめかみのあたりに、血がにじんでいた。軽い傷だった。

幼子は生命を取りもどすと、激しく泣きわめいた。

「坊や、よかったね。」

と、義三は子どもをゆすぶって、笑ってみせた。その頭の上から、

「坊やあつ。坊やのばかつ。」

と、悲鳴が落ちかかって、義三がはっと身をひくうちに、幼子は若い女に抱き上げられ、抱きかえられていた。

夕顔の扉

いつか人垣をつくった、その足の輪のなかで、義三はびしょぬれの姿を照れて、

「ワイシャツよりも、ズボンを脱げばよかったな。」

と言うと、だれかが、

「走りながら、ズボンは脱げませんよ。」

子を抱いている娘の細ぼそとした肩に、

「さあ。僕、病院の者ですから、病院へいらっしゃい。注射しといてあげましょう。」

と、小声に言ってうながした。

「それから傷にも……。たいしたことはないと思います。」

義三は水のたれるズボンをひきずって、病院へひきあげた。

途中で、義三の脱ぎ捨てたワイシャツを抱えてくる、看護婦に迎えられ、パトロオルにも出合った。

病院の入り口にも、同じインタアンの女友だちや、小使までが顔をそろえて立っているので、義三はすっかり照れてしまって、はしやぎまわる人たちに、身の処置をまかせたようなぐあいだつた。

バス・ルウムに入れられて、からだを洗って出ると、更衣室には、看護婦たちが調達してくれたらしい、ランニング・シャツとパンツ、それからだれのものか、紺サアジの学生ズボンもあった。ズボンは義三には少し短かつた。

医務室には、義三と同じ大学を出て、やはりインタアンとして、この病院に来ている、井上民子が黒く小さい瞳をかがやかせて、義三を待っていた。

「栗田さん、私がどなったのよ。窓から川を見ていたのよ。」

「そう？ 君だったのか。」

と、義三は民子を見て、

「あの母子、来ましたか。」

「母子じゃありませんわ。姉弟ですわ。」

「ほう、きょうだい……？」

「傷を消毒して、マアキュロ……、ビタ・カンも打っておきましたわ。」

「それは適当な処置……。」

「さようでございますか。」

と、民子はおどけたふうに頭をさげて、

「今の人ね、国家保護を受けているんですって……。栗田さん、あの娘さんの目をごらんになっ

たり？ とても、きれい。びっくりするくらい……。まだ診察室にいます。」

義三は白い予防着を着て出ると、診察室の扉を押した。

あの若い女が、まだぬれたままの子をひざに抱いて腰かけていた。

「早く着かえさせたほうがいいですよ。」

それだけの言葉を言ううちに、義三はほおが燃えるようだった。

娘の目の美しさに、義三は射すくめられた。その目は義三の今洗った髪や、若わかしく赤らめた顔や、白い上っぱりや、少し短い借りズボンからはみ出して、スリッパをつっかけた足まで、一瞬